

「文学」の裏切り

——小説家・吹田順助をめぐって——

高 田 里 恵 子

明治40年の動揺，あるいは第一の決断

明治40年（1907年）7月，24歳の吹田順助は東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業する。9月から札幌農科大学の予科のドイツ語講師となり，生まれ故郷の東京を初めて離れることになった。東北にすら行った経験がなかった生粋の江戸っ子が北海道へ渡るといふ心細さ以上に，この就職が小説家として立つという吹田の望みをひとまず中断することを意味していた事情が，青年の心を暗くしていた。不遇だった父を早くに失った家の長男として，母や妹たちを養う義務が青年の肩にのしかかっていたのだ。何編かの小説を残した吹田ではあったが，小説を書くことは生涯この「ドイツ文学者」の趣味にとどまった。

小説家になりたくて，しかしついにその望みを達成できなかったこと，そしてそれが家庭の各種の不幸と結びついていたこと，それは吹田順助の自伝『旅人の夜の歌』のなかで繰り返し語られる。挫折の言説は，こうして吹田自らによって演出されたものであるにもかかわらず事実として流通してゆく。『回想の吹田順助先生』のなかで，吹田に近いと自認する弟子たちは，亡き先生の挫折と悲しみを，それを堂々と語れることこそが親密さの証であるかのように言いつのり，反対に，社交辞令的な思い出記において適当に称賛されるのは，吹田先生の，他の「ドイツ文学者」には見られなかった「小説家」的才能なのである。とにかく，本人の挫折譚なぞまともにとってはなら

ない。吹田本人に誘導された、吹田をめぐる言説に共通しているのは、「ドイツ文学者」としての著書や翻訳も多く、この点では功なり名とげた吹田順助がけっしてそんなところで満足してしまうような「小さな」人間ではなかったことである。日本のドイツ文学研究がアカデミックな気風を特徴とするというのは一つの虚構である。この嘘に支えられてこそ、「ドイツ文学者」としてそれ相当の地位も得て、しかも（あるいは、にもかかわらず）「文学」が分かる人、小説を書く人が尊敬される。吹田はその輝かしき第一号であった。もともと、こうした「ドイツ文学者」が本物の独立した小説家になってしまったら、すべての物語はぶち壊しになるのは言うまでもない。

昭和11年（1936年）に「教師と創作」と題する、次の一文を『文春』に載せたときには、吹田はすでに小説家になるという望みを半分以上捨て去っていた。

夏目漱石、有島武郎、芥川龍之介も初めは教師をやっていた。（中略）
 兎に角創作の道に進むためには、三氏ともみんな教職なんか捨てて了った。その捨て方は少しずつ違っているにしろ、とにかくみんな捨てて了ったのである。何うもそこに争われないあるものが介在している様である。考えて見ると学校とか教師の生活とかぐらい、芸術や創作やと縁遠いものはない。教師生活に何かある不満なり懷疑なりを持って人には話の分かるのが多いが、得々として先生になり切ったような手合にはたまらないのが多い。そんな連中に限って、授業の方などは一向冴えないのである。それに教授会の空気なんてものは、ヴェーデキントの「春の目ざめ」にもあるように、実に退屈極まるものであり、時には滑稽極まるものさえある。先生々々と言われながら、先生というものは結局坊主と同じような生活をやっているのである。思い切った事をやれもしないし、書けもしない。（中略）まあ文学の方面で先生のやれることと言ったら、翻訳とか紹介とか、随筆ぐらいなところであろう。ところが紹介や評論をやるにしても、先生の書くことはとかくジャーナリズムや文壇人の行き方とかけ離れているので、大抵

「文学」の裏切り

は無視されてしまうのである。無視されなければ、アカデミック・フルールなんていう尊称を奉られるのが関の山である。尤も中にはひそかにその辺から何か教わっていながら、一向歯牙にかけないような顔をする文壇人もいるようである。何うも日本ぐらい文壇的意識の強いところはないようだ¹⁾。

ここでは「教師なぞしていたら創作はできやしない」と言われているように見えて、実はそうではない。むしろ、吹田の教師としての、しかも「文学」を真に理解する教師としての自信は簡単に読みとれるだろう。排他的な「文壇人」は、自足した「先生」と同じほどに吹田の批判の対象となっているが、漱石・有島・芥川という死者たちがこうした「文壇人」を越えているのは、彼らがかつて教師であったからなのだ。教師・漱石には、吹田は一高・東大時代に接している。有島は吹田の札幌時代の同僚で、ともに創作を競いあった仲であった。しかし、生活のために教師になろうとしたわけではない裕福な有島は、貧しい吹田をひとり残して東京の「白樺」へと合流する。芥川とは個人的接触はまったくなかったが、吹田より9才年下の芥川は「年少気鋭の才人に登龍の機会が与えられるようになった」²⁾ 大正時代に活躍することができたという点で、吹田の羨望の的となっていた。因みに、この「教師と創作」が書かれた前年の昭和10年に制定された芥川賞（と直木賞）は、何のコンネクションも師も持たない新人の登龍門として構想されたものであり、吹田の頭にはこの賞の性格も思い浮べられていたかもしれない。とにかく、明治40年に若い吹田が迷いに迷っているときには、作家になるための「制度」なぞ確立されていなかったのだ。

しかし、この明治40年、ある文学史的変動があった。それが吹田の迷いをさらに増幅させたことは間違いない。周知のように、この年の3月、夏目漱石が東京帝国大学をやめ朝日新聞社に入社したのである。吹田の在学中の出来事であった。帝国大学の教師が一介の文士になるという前代未聞のことが起こったのだが、漱石が朝日新聞との契約において報酬と身分保証をめぐってかなり細かい取り決めを交わし、作家の地位の安定と向上を計ったこと、

さらに文芸欄を担当し、多くの新人に作家になる機会を与えようとしたことも注目しておいてよいだろう。そしてもう一つ、6月に時の総理大臣西園寺公望が官邸に文士たちを招くパーティを催した。これが話題になったのは、当時アカデミー・フランセーズを真似て日本にも文芸院を設立しようという動きが出ていたためである。漱石は出席を断った³⁾。漱石が「文学」の「国家」からの独立を主張してやまなかったことは、しばしば指摘されてきているとおりでである。「文学」の地位は引き上げられなければならない、しかし、それは「国家」による保護とは別のところで実現されねばならない。漱石は文学研究を創作より下に位置づけてはいなかったが、帝国大学教師としての英文学研究が「国家」と分かちがたく結びついていることに無自覚ではなかった。

ここで漱石の動向に触れるのは、吹田の大学生時代が奇妙に漱石の作家的出発点と重なっているからである。吹田は日露戦争の最中の明治37年9月に入学するのだが、4ヶ月後の38年1月に発表された『吾輩は猫である』によって一躍、漱石の名が注目されはじめた。吹田が、一高時代の同級生で親しくしていた安部能成や岩波茂雄がそうしたように、尊敬し憧れていた漱石の山房を訪ねなかったのは、おそらく吹田が上田敏の従弟で、いろいろと上田の世話になっていたことに因るのだろう。同じ英文科の講師であった上田と漱石は、本人同士の関係はともかく、まわりが一種のライバルと見なしていた。

重要なのは、漱石が当時描きだし、また自ら主人公となって演じた「文学」と「教師」との物語、あるいは「文学」と「国家」との物語が吹田の心に静かに浸透していったことだ。『猫』、『坊っちゃん』、『野分』、『虞美人草』そして『三四郎』と、明治40年前後の時期の小説の多くが何らかのかたちで「文学」と「教師」（あるいは「博士」）をめぐる葛藤を登場させる。「文学」に関わる者が制度や制度的立身出世から自ら降りてしまうという物語が、時には喜劇的に時には悲劇的に紋切型すれすれのところで繰り返されるのである。「文学」のために三度も中学校教師をやめざるをえなくなる主人公白井道也をもつ『野分』（明治40年1月）などは「白井道也は文学者である」と

「文学」の裏切り

いう「小説としてほとんど致命的な一行から書きはじめられ」⁴⁾ なければならなかった。

当時の「文学」の地位の低さについて、吹田はこんな思い出を記している。

……入学すると間もなく、同学長（坪井九馬三文科大学学長……引用者）の名において、一枚の訓辞（？）が掲示され、その中に「文学は琴書に等しく」という文句があったので、それが学生間でひとしきり問題になったことがある。訓辞の要旨ははっきり記憶していないが、史学や哲学は学問であるが、文学は琴書と等しく有閑人のディレッタントイズムだというような意味であったように思う。これが文科の学長たるものの意見なんだから、文学科の学生があきれもし、憤慨したのも無理はない。（中略）しかしこんな問題は今ではむしろ取るに足らぬ言説で、ただ当時の学者或は一般文化人が文学をいかに評価していたか、の一標徴として指摘したに過ぎない⁵⁾。

この「文学」は厳密に言えば文学研究の意味であろうが、坪井学長の言葉がそもそもそうであったように、吹田のことばのなかでも創作と研究の両方を指してしまっている。さらに次のことに注目するならば、上記の内容の意図されざるアイロニーが浮かび上がってくるだろう。磯田光一によれば、訳語の「文学」が現在の意味として定着するきっかけとなったのは、明治20年に帝国大学に英吉利文学科と独逸文学科が、22年に仏蘭西文学科が新設されたことだったという⁶⁾。当初「文学」とは、文武両道などと言われるときの文、つまり「学問」を意味していた。それがやがて変化し、「国家」の欧化政策のひとつとして新設された英・独・仏の文学科で扱っているものとその扱い方が「文学」と呼ばれるようになる。そして日露戦争前後の時期、つまり日本国家がようやく一息つけたとき、あるいは漱石が作家として出発しようとしていたとき、「文学」は「学問」（＝「国家」のための「学問」）ではないとまで言われてしまう。

この「文学」の変遷のなかに、明治の第一世代たる漱石と第二世代である

吹田順助との相違が浮かび上がってくるだろう。漱石は徐々に裏切られ、発狂の噂が立つほどに独自の『文学論』を構想し、そして作家になる。吹田は「文学」科を選んだときから、明治国家のなかの立身出世に対する違和感を動機としており、「文学」の「文学性」は自明すぎるもので、大学教授の地位を捨てて作家になるという行為はもはや冒険ではなく、「文学」の正しい道であった。

吹田は漱石への愛着を「純粹の東京人」⁷⁾という共通点のなかに見いだしているが、吹田の場合はこれに幕臣の家系というのが加わる。父親は戊辰の役のさい上野の山にたてこもり最後まで官軍と戦い続けたひとりであり、その後明治政府において官途につくも明治24年に失職する。「父が非職を命じられたのは、この前後からして東京帝大の法科出身が漸く進出して来た結果らしい」⁸⁾。この『浮雲』の文三さながらの失職とその後の父の急死のために吹田順助は金銭的に苦勞もし、ひいては小説家への道を諦めざるをえなくなるのだが、他方で、「まだ小学校に通っていた私を将来どうしても帝大（法科……引用者）に入れねば」⁸⁾と言っていた父を裏切るかのように「文学」科に進んだのだった。明治政府への復讐を、その制度の内部での立身出世によって果たそうとする父、「国家」からの施しと干渉を嫌悪する漱石、たとえばこの二人と比較しても、吹田（あるいは吹田の世代）にあっては「国家」に対するこだわりが希薄になっている。吹田がやがてあの日本の最も暗い時代に、ナチスを称賛する有力な「ドイツ文学者」のひとりとして、「国家」とか「民族」とか「日本精神」とかいう言葉をいとも気楽に口走るようになる理由はここにあるのかもしれない。だが、この問題については最後に触れようと思う。

大正14年の帰京、あるいは第二の決断

大正14年（1925年）4月、吹田順助は長年の念願であった東京への帰還をついに果たす。東京商科大学予科教授兼同大学助教授となったのである。昭和5年には教授に昇進しているのだが、わざわざこのように細かく身分を書

「文学」の裏切り

き記したのは、予科のドイツ語教官が、経済学や商学を中心とする大学においてあまり重要視されていなかったことを強調しておきたかったからである。もっとも、こうした軽視、つまり気楽さは吹田の望むところでもあった。教授会においても、時たま東京商科大学出身者と東京帝大出身者との争いに巻き込まれるという事態さえやり過ごせば、吹田は呑気な外様でありつづける。東京商科大学は吹田の転任と同時に東京高等商業学校から大学に昇格したのだが、その際、今も一ツ橋大学に残る独特のゼミナール形式を採用し、学生たちは実学の学校にしながら、希望するならばたとえば吹田順助のドイツ哲学・文学のゼミナール生になることができる制度が確立した。それなりに文化人でも学者でもあり、高踏派ジャーナリズムで活躍していた吹田は、こうした、のちには実業界に入っていく「文学」好きの青年たちを魅きつけた。吹田ゼミナールはなかなかの人気を博していたという（現在で言えば、フランス文学者の一ツ橋大学教授海老坂武氏のような存在か）。

時局がらみで東京産業大学と名前を変えていた東京商科大学を昭和19年に停年退職するまで、戦争という非常事態がもたらしたものを除けば、吹田は快適な大学教師生活を過ごした。あまりに快適すぎたのがまずかったのか、すべてが終わってしまった時点から見返してみると、かえって東京に帰ってきてからのほうが、小説家になりたいという吹田の望みがしぼんでいったことがわかる。すでに述べたように吹田が大学卒業後札幌への赴任をためらったのは、当時東京を離れることは小説家になりうるかもしれないという環境を離れることを意味していたからである。「それにしても東京のどこかの学校の教師となることが出来たなら、傍ら、文筆生活をつづけることも可能であったろう」⁹⁾と吹田はのちになっても、この出発点の躓きを悔やむ。そして18年後に念願の帰京を果たしたときには状況はすっかり変わっていた。「ドイツ文学者」として「書く」ことが世の中に定着しはじめていたのである。

ここで注目しておかなければならないのは、有力な「ドイツ文学者」となった吹田が「ドイツ文学者」たちを育成する部署にはいなかったことだ。吹田

が東京商科大学の教師になったことは、日本のドイツ文学研究の歴史のなかでひとつのメルクマールとなるだろう。山形高校時代、東京商科大学への転任話と同時に、東北帝国大学への招聘もあったと言われている。山形時代の教え子のひとりには、「どうして先生が独文学の講座のある大学ではなくて言わば専門違いの大学を選ばれたのか、ちょっと不思議にも思えるのだが、既に山形時代の終り頃から御家族を東京に移されて土曜日ごとに東京に行かれて月曜日に帰って来るようにしておられたので、東京の学校を選ばれたのは当然のことだった」¹⁰⁾と推測するが、おそらく現代ならば、もはや「ちょっと不思議」ということさえないだろうし、東京出身者が故郷に帰りたがったという理由もあまり説得力をもたないかもしれない。ドイツ文学研究が大学内部の口頭伝授といった性格を失い、大量出版時代とともに出版メディアの世界に入ったこと、そしてその出版文化・ジャーナリズムの都会への集中は、現代のほうがより明確に見て取れる事実であるが、ほぼこの大正後期に始まっている。こうして後進たちを育成するという地位は独文業界内での権力と必ずしも結びつかなくなった。しかも、東京商科大学の学生のように優秀で、のちのちには実業界で相当の地位につくであろう青年たちに、「教養」としてドイツ文学を教えることは気楽でそのうえ知的な仕事でもある。これこそ、この時期の日本のドイツ文学受容の一縮図ではないか。吹田順助が「ドイツ文学者」になる条件は着々と整っていたのである。

もともと、吹田によれば、札幌の次に移り住んだ鹿児島第七高等学校から山形高校へ赴任するときに、すでに「小説家」として立つことを諦めていたという。大正9年7月に、吹田は山形高校のドイツ語主任になる。卒業後もずっと教師をしていた吹田順助の人生の区切りは、つねに学校の卒業時と新学期、すなわち夏の季節に重なるのだが、東京商科大学に移ったおりには、すでに高等教育機関の4月入学制が始まっていたので引っ越しは3月になった。こういう些事を書くのは、教育制度の変動が、それに関わる人間の歩みに影響を与えうることをいま一度確認しておきたいからである（よく挙げられる例は、こんなものはどうにでもなると思って第四高等学校を退学した西

「文学」の裏切り

田幾多郎が、東大の選科にしか入れず、制度から一度離脱してしまった者の辛酸をなめつくしたことだろう)。漱石の大学辞職と朝日新聞入社は、いまだ若かった制度の不安定さと、それでいて奇妙に硬直化していることと切り離せない。因みに、漱石は3月に大学を辞めているので、現在の感覚で言えば、ちょうど夏休み後の後期授業を前にして大学を去ったことになろう。そして一度去った人間は二度と受け入れないほどには大学制度はすでに固まっていた。漱石の学歴を見ても、教育制度がまだ十分に整っていなかったせいで、高等中学に入るまでの経歴はかなり変則的である。それに対して、明治16年生まれの吹田は小学校から学校制度を普通に享受しえ、自分自身が教師になったおりに、同僚たちも制度的高等教育を経てきた者たちであった。

吹田が移った山形高校は新設の高校だった。この大正9年に一挙に高等学校の数が増えたのである。これは大正7年の高等学校令に基づいた措置であり、同時に制定された大学令によって帝国大学の改組と私立大学の設立が進む。ここにおいてほぼ、近代日本の高等教育制度が安定したと言ってよいだろう。他方、大学令に対抗するように東大新人会が結成され、その影響でいわゆる左翼運動が一気に全国の高等学校に広まっていったことは周知のとおりである。まさに国家のためになる人材を育成する場所で、それに反する動きが生まれてきた。日本社会は固定されつつ、内部から揺れはじめていたのである。人々は流動性を失いつつ、内部の不安定を感じていたのである。

さらに、文壇のほうに目を向けてみると、大正8年にはいわゆる島田清次郎ブームが起きている。弱冠20才で、文壇に何のコネももっていなかった田舎の青年が突然「天才」と祭りあげられ、彼の小説『地上』がベストセラーとなる。出版社主導型のジャーナリズムによって、新人作家が仕立てあげられベストセラーが作られるという時代の幕開けだった。明治の徒弟制度的文学修業の時代はとうに終わっていたのである。吹田が大正9年の山形高校赴任のおりに、最も深く悩んだのも偶然ではない。

今考えると、それ（山形赴任の話……引用者）を機会に自分としては学校を辞して、捨身になって自分のかねがね望んでいた創作の方面に出て行ったら、一時は苦しいにせよ、自分の行くべき路は拓かれたであろうとも思うのであるが、そのときはやはりそれだけの決断はつかず、言わば惰性の法則に支配されたというのか、私は新設の山高に転任することに決心したわけである¹¹⁾。

山形高校行きが制度のなかでの安住を最終的に選択することを意味してしまおうと知っていた吹田が、昭和前期に制度的「ドイツ文学者」として何を行なったか、おそらく別に深い意図からではなく、「言わば惰性の法則に支配されて」何を行なったか、つまり吹田が、あれほど愛した「文学」にどのように裏切られていくか、それについては次章で触れようと思う。

その前に、大正14年の吹田の帰京とともに初めてドイツ文学研究の専門誌が発行された経緯を述べておく。『回想の吹田順助先生』のなかで、そのことを語るのは高橋健二である。高橋と吹田順助の関係は、主に戦後、新設の中央大学独文科の同僚になってから生まれた。大政翼賛会文化部長であったために公職追放となる高橋健二は、この追放が解除になったあと中央大学に職を得ている。高橋の世話をしたのは、東大仏文を退官したのちにやはり中央大学で第二のお勤めをしていた辰野隆であるが、吹田の推挽もあったらしいことは高橋も述べている。吹田もまた、あやうく公職追放の網にひっかかりそうになった身であったから、高橋の「不運」に対しては同情的だったのかもしれない。しかし、これも次章で触れることにして、いまは大正14年に戻ろう。

当時、東大の副手を務めていた高橋健二は、東京に帰ってきた吹田順助の歓迎会をかねてドイツ文学科の同窓会を開くことを「仰せつかる」（高橋が副手時代の思い出を語る口調は、いつもこのように恨みがましく慇懃無礼である）。その席上、吹田が「ドイツ文学の機関誌を出したいという提案」をする。「有力なドイツ文学者が三十人くらいも集まった会合で、先生の提案

「文学」の裏切り

は満場一致で取りあげられた。ところが、その編集事務は、副手であるわたしに課せられた。そんな才能も経験もないので、わたしは全く困ったが、やるほかはなかった」。しかし、高橋一人の努力と雑用で出来上がった雑誌を見て、「（吹田）先生は意に反したという顔をされた」。吹田は「もともと、研究と同時に相当自由なやわらかい文学的な雑誌にしたい」と考えていたが、出来上がったのは、お堅い研究論文だけを掲載した、おまけに表紙まで堅くて箱入りという「雑誌」だったのである。高橋健二は、「あの時、わたしはもっと吹田先生と接触して、先生の意図するような軽快さを取り入れたら、もっとらかなものができて、ドイツ文学の風通しをよくすることができたらうに、とあとで残念に思った」と言いながら、吹田自身の寄稿したのも堅い研究論文であったことを強調している¹²⁾。

実際、高橋健二副手の獅子奮迅の活躍で、大正最後の年の11月にようやく出た『独逸文学』は、ドイツ文学研究の日本における歴史を体現していたのかもしれない。『独逸文学』が発行されるひと月ほど前、まったくの偶然であるが、仏文の研究室からは「仏蘭西文学研究」の第一号が出る。「仏蘭西文学研究」は学生であった今日出海と中島健蔵が計画し、やがて本格化してくると教授の辰野隆や鈴木信太郎に乗っ取られるというかたちになったらしい¹³⁾。こちらのほうも、あまり一般受けする雑誌ではなかったが、何しろ執筆者たちが小林秀雄をはじめとして「文学史」に名を残す人たちなので、資料的価値は『独逸文学』よりも高いと言えるだろう。もちろん、この「仏蘭西文学研究」の経緯や内容も日本におけるフランス文学研究の歴史と無関係ではない。

しかし、ドイツ文学研究はフランス文学研究に比べて、近代日本の負の歴史とより深く関わっているので、『独逸文学』の第一号は昭和初期の日本の歩みを不気味に予言してしまっている点では「仏蘭西文学研究」に（残念ながら）勝っている。まず巻頭の論文が、吹田の師でもあり最初の「ドイツ文学者」でもある藤代禎輔の「内面的形式」、次に、当時東大の外国人講師であったオーフェルマンズの「現代独逸文学の精神に就いて」が高橋健二の訳

で続き、そして吹田の「独逸的形式に就いて」が来る。そのほかの6編の論文がゲーテやシラーなどの個別研究であるのに対し、この最初の3編のテーマは、「ドイツ文学」とは何か、あるいはもっと正確に言えば「ドイツ文学」を成立させている「ドイツ精神」「ドイツ民族」とは何か、というものであった。高橋によれば、これは偶然の一致だったそうだが、それぞれが最初のドイツ文学研究専門誌を意識した結果だったのだろうか。そもそも、医科を志望していた藤代が独文科の一期生になることを決心したのは、教師のハウスクネヒト（本当は教育学の専門家だった）がドイツ文学研究とは「ドイツ民族の精神的発展を研究する学問だ」¹⁴⁾と言ったので、この学問にひじょうに興味を覚えたからだったという。これは、漱石がイギリスのナショナリズムと結びついた英文学を嫌い、ローレンス・スターンやスウィフトを扱おうとしたことと対照的だ。因みに、漱石と同じ船「プロイセン号」(!)で渡独した藤代は、漱石発狂の報せを日本から受けて、わざわざロンドンに様子を見にいっている。

話を『独逸文学』に戻すと、藤代の論文も吹田の論文も、当時ドイツで盛んであった精神史に基づくドイツ文学研究を紹介しており、ヴァルツェル、ヴェルフリー、グンドルフ等の名前が共通して挙がっているし、吹田は特に自分が翻訳出版したブランデスにたびたび言及する。テーマの性質上、自分の見解を出すことより、どうしてもドイツ人研究者の著作の紹介に終始してしまうのはしかたがないだろう。しかし、藤代と吹田のあいだに印刷されているオーフェルマンズの論文はそのことを問題にするのである。日本人がドイツ人の研究を重んじるのは当たり前だ、しかし「日本に於いて使用される殆んど凡ての参考資料はドイツ精神史の一方的にかぎられた部分に過ぎないこと」(傍点原文)に無自覚な日本人研究者が多いのは由々しき問題である、と。どうやら敬虔なカトリック教徒で、ワイマール共和国を憎悪している保守派であるらしいオーフェルマンズにとって、自由主義がドイツ精神の代表であるかのごとく、この遠い極東の国の知識人たちのあいだを闊歩しているのが我慢ならない光景であったようである。ではドイツの自由主義者と

「文学」の裏切り

は誰か。ユダヤ人だ。「非常に多くの文学史の教授，異常に多数の文学批評家，文芸記者がユダヤ人であるばかりでなく，最も顕著な劇場，最も有力な文学雑誌，最も大きなドイツの新聞の所有管理者はユダヤ人である」。しかも，ユダヤ人はその事実を巧みに隠蔽している。「従て，ドイツ語を学ぶ日本人は屢々，例えばベルリーネルターゲブラット，フォッス紙，フランクフルト紙等の新聞或はDie deutsche Rundschau，Die neue Rundschau，Die Literatur等の雑誌がユダヤ人によって出版され，管理されていることを全く予想しない。又例えば日本人が多も多く読む所のゲーテに関する書籍—ピールショウスキー，ウイトコウスキー，ハイネマン，エル・エム・マイエル，ジンメル，エミール・ルードウィッヒ，ブランデス，グンドルフ等の著者—が凡てユダヤ人によって著されていることを日本人は恐らくもって考え及ばなかったであろう。世界観の上から言えば，ドイツに住んでいる殆んど凡てのユダヤ人は自由主義者である。然も最も根本的な意味に於いて」¹⁵⁾（傍点原文）。記者の高橋健二は「中にはさんだドイツ語に誤植があるのをオーフェルマンズさんにみつけられて，しかられた」¹²⁾ そうである。これだけの雑用とあまり賢くない論文の翻訳を引き受けさせられて皆に叱られていては高橋副手がほんとうに気の毒でならない。

もっとも，オーフェルマンズは勝利した。やがて，ナチス時代の日本のドイツ文学研究はこのオーフェルマンズの「忠告」を受け入れてゆくのである。「一九三三年以前のドイツ出版界が，新聞といわず雑誌といわず，如何に猶太系の資本主義によって支配せられていたか，又文壇の動向は少なくとも外観上はこれら圧倒的猶太系の発表機関の騒音によって如何にねじ曲げられていたかを知るならば，誠に思い半ばに過ぎるものがある。われわれも亦一時こうして騒音に惑わされた」¹⁶⁾ とは、『独逸文学』第一号にはゲーテのファウスト論を載せている木村謹治（昭和前期の東大独文科主任教授）の言葉だ。昭和2年に亡くなった藤代禎輔は，「ドイツ民族の精神的発展を研究する学問」の行方を見届けることはなかった。吹田順助と高橋健二は，この反ユダヤ主義的傾向を日本に肯定的に紹介するのに少なからぬ貢献をすることになる。

昭和13年の転機、あるいは第一の裏切り

昭和13年（1938年）、吹田順助はローゼンベルクの『二十世紀の神話』を翻訳出版する。昭和17年にはやはりローゼンベルクの『理念の形成』も訳している。『二十世紀の神話』がどのような書物であったかはもはや説明の必要はないだろう。戦後、吹田順助は公職追放の候補者リストに名前を載せられるが、その理由はこの二冊のナチスの聖典を訳したというものであった。たまたま運よく審議会の委員長が一高時代の吹田の知り合いで、「私のためになんとか弁明してくれたらしく、そんなわけでパージの厄は免れたわけである」¹⁷⁾。「パージ」の件について吹田が単なる受け身の存在であったように、この翻訳の仕事も吹田が積極的に求めたものではなかった（という）。

『二十世紀の神話』（後に同じ著者の『理念の形成』も訳したが）は、実をいうと、中央公論社の木内高音氏に勧められて、共訳者と共に訳出したものである。私はその前から同書は当時、ナチスの経典のように見做され、ドイツ国民の必読書となっていることは聞いていたが、丁度翻訳を頼まれたので、初めの二、三章をひとわり読んでみて、その元気のいい、いや、むしろ強烈な論調によって、一種の感激のようなものに牽き込まれた（中略）しかしナチス・ドイツのポーランド侵入を耳にした時分から、焚書事件やら、異民族排斥やら、—その後大分経ってからの事ではあるが、—猶太民族大量虐殺事件などを聞いてから、つまりナチス政策のどす黒い方面がだんだん暴露されるようになってから、『神話』の翻訳などを引き受けたことを、後悔するような気分になって来た。私は開き直って言うほどの事でもないが、いわゆる全体主義者でもなく、むろん軍国主義者でもない。それがああいっただ本の翻訳を引き受けて、ナチス精神の鼓吹に一時力瘤を入れたような観があったのは、明治人にありがちな忠君愛国の精神—戦争が始まった以上日本を負かせたくないというような—も大分手伝っていたであろうし、とにかく総じてナチス精神というものをいわば理想化して考えていた結果であることは、なんとしても争われない¹⁷⁾。

「文学」の裏切り

吹田は数多くの翻訳を出版している。「先生はたいへん御苦勞をなされたようで、それをご自身のことばかりでなく、一家の総領としての責任感から御兄弟御姉妹の面倒を御覧になるためにも、物心両面とも御苦勞なさることが多かったようである。先生が多作で、ことに翻訳が多いことは、先生の才藻もさることながら、世俗的な理由もあつたのではないかと拝察する。私などは、いま少し筆硯をおさめて思索のいとまを持たれた方がよかつたのではないかと思つたこともある。(中略)先生の思い出を書くつもりで、先生の棚おろしのように申しわけないが、それも先生と御入魂を願つたものの記録として後の世に伝えておきたかつたからである」¹⁸⁾とある教え子が言うとき、『二十世紀の神話』の翻訳や「ナチス精神の鼓吹」のために雑誌などに書いた文章を指しているにちがいない。この見解と真っ向から対立するのが有島武郎の見方である。有島が明治42年に書いた短篇小説『半日』のなかに、吹田をモデルとした井田と称する27歳のドイツ語教師が出てくるのだが、井田が当時知識人のあいだでよく読まれていた(とりわけ漱石に与えた影響は大きい)ズーダーマンの作品の翻訳を企てているという一節がある。「相島(有島をモデルとする主人公……引用者)は井田がフラウ・ゾルゲの翻訳に着手しようとして居るのを知つて居る、而して『あれが井田の弱点だ。井田は動かされ過ぎる、も少し執着するといひんだ』と思つた」¹⁹⁾。この予言的分析は見事であつた。実際、『二十世紀の神話』を抜きにしても、「ドイツ文学者」吹田順助は翻訳にしる著作にしる、かなり雑多なものに少々無節操に手を出したという印象を与えるだろう。それがお金のためだった、というのが先ほどの弟子の意見なのである。

しかも吹田は、翻訳に関してかなり大きなスキャンダルも残した。昭和8年(1933年)10月、日本語訳のハイネ全集が出始める。第一巻配本は吹田訳の『ロマンツェーロ』であつた。この年の5月、ドイツ本国ではナチスの焚書でユダヤ人ハイネの著作は焼かれているし、ローレライを歌うことも禁じられるのだが、ちょうどこの時期にハイネ全集が日本で出たのはまったくの偶然であつたという。しかし、翌9年の2月早々に第四巻配本をもって全集

が中絶されることになるのは、おそらく何らかの日本側の配慮の結果であろう。和田洋一は、こうした政治的な理由の他にもう一つの推測を提出している。「第二に、全集第一回配本の吹田順助訳『ロマンツェーロ』が、法政大学の関口存男大先生によって誤訳、迷訳、悪訳を指摘され、その指摘のしかたは辛らつ、痛烈をきわめた。そのために吹田は第五回配本の中止を申し出たのであろうという推測、吹田順助訳というのは実際は若いお弟子の訳であったかも知れないが、そのへんに吹田のハイネへの愛情不足が感じられる」²⁰⁾。吹田の自伝のなかには、このハイネの翻訳はローゼンベルクのものとは違って訳業として挙げられていない。弟子の訳を吹田の名前で出版したのか、それとも吹田の誤訳だったのか、いずれにしろ、このハイネの件は吹田の仕事の在り様を象徴していた。

吹田順助訳の『二十世紀の神話』は、その内容をひとまず問わなければ、著名な「ドイツ文学者」が「文学」（もしくは哲学）作品・論文以外の書物を翻訳するということの第一号であった。今では文化史・社会史・風俗現象といった類の本（とりわけナチスに関する書物）を翻訳出版する「ドイツ文学者」はさほど珍しくないが、こうした本が「ドイツ文学者」と呼ばれる人たちの手で翻訳・紹介されるのは、実はナチス時代に始まったのである。そのような翻訳が「業績」としてもカウントされるようになったとか、より多くの読者（と金銭）を獲得できるとかということが全然ないわけではないだろう（とりわけ現代においては）。実際、『二十世紀の神話』は、1941年の時点ですでに9刷になっている。しかし注目しておきたいのは、「文学」が関係していると見なされる領域が次第に拡大していく過程である。この『二十世紀の神話』にしる『吾が闘争』にしる、ナチスの書物はきわめて「文学」的、より正確に言えば、「現代文学」的なものに映ったにちがいない。それは、ぜひとも「ドイツ文学者」によって訳出されなければならなかったし、反対に「ドイツ文学者」に訳されることによって「文学」性が保証されるのだった。しかも、こうなってくると「ドイツ文学者」たちも単にゲーテの素晴らしさをうたったり、最近の文学動向を紹介したりするだけではなく、「文学」

「文学」の裏切り

を扱いながら同時に何かアクチュアルな「問題」を提示してみせることを求められる。このジャーナリスティックな強迫症的良心のなかに、「いわゆる全体主義者でもなく、むしろ軍国主義者でもない」、むしろ文学青年的リベラリストと言ってよい吹田順助や高橋健二が「ナチス精神の鼓吹に一時力瘤を入れ」てしまった理由がある。

ここで、明治16年生まれの吹田の世代について若干触れておかなければなるまい。これについては幸い、一高時代の同級生などの名を挙げると自ずと浮かび上がってくる仕組みになっている。同級生で同じ文芸部員に阿部次郎、岩波茂雄、一級下に藤村操、安部能成（彼は『回想の吹田順助先生』にも一文を寄せている）、魚住影雄がいた。華嚴の滝の自殺で知られる藤村や伝説的夭折者である魚住の名前が語っているように、まず第一に吹田は、前田愛が三四郎世代を指していった明治40年代の「煩悶」する青年知識人のひとりであった²¹⁾。そして第二に、唐津順三の言う「教養派」²²⁾、あるいは『三四郎』の登場人物与次郎の主張する「明治15年以降に生まれた」「我等新時代の青年」であった。「教養派」とは、漱石・鷗外のような「素読派」に対して、「明治15年以降」とは、広田先生のような「明治元年」前後の生まれの者に対して言われている。要するに、この世代は大正時代にあの一瞬の日本の安定を享受し、教養主義・文化主義の担い手となった者たちなのである。

教養主義的読書に対する批判はすでに繰り返しなされているだろう。そしてそれは、日本ファシズムにいと簡単に屈伏した知識人たちへの批判に通じていくのである。「ロマン・ロランに比較された武者小路実篤、ロダンに傾倒した高村光太郎、ヘッセに傾倒した芳賀檀、おなじくヘッセとゲーテに傾倒した高橋健二、ジイドに傾倒した堀口大学、日本のモダニズム文学における代表作家横光利一と代表的詩人萩原朔太郎が、日支事変をむかえて一気に近代的教養をかなぐりすてて古代日本天皇制の生活感情に戻っていった」²³⁾と鶴見俊輔は指摘した。「幼少時の原体験をそのまま中心のダルマとしてひめておき、その上に成人期以後の読書をまいてゆくという大正・昭和の訓練の仕方（教養主義）に根本の問題があるように思われる」²³⁾。ここでは「ゲー

テもジョイスも国体にもとるものであり、ロマン・ロランもトルストイも階級支配とあいられないものであるということをはっきりとつかまえて、天皇制と階級支配の肯定の上になつ自分の原体験にたいして自分の読書体験をくりかえしぶつけてゆく」²³⁾ 作業がまったく欠けていた。

鶴見俊輔の分析の正しさとともに、教養主義の担い手たちが「読書」する人である以上に「書く」人であったことに注目しておきたい。つまり、教養主義的読書ではなく、教養主義的著述が問題なのである。大正時代を席卷した教養主義の萌芽は、明治39年9月新渡部稲造が一高の校長になったことのなかに見いだされるという²⁴⁾。新渡部は内面・人格の充実を求め、外面的な立身出世を軽んじたが、この内面性が教養主義の精髓であったと言えよう。しかしながら、メディアへの煩雑な登場なしには、つまり外面的に華やかな活躍なしには、内面が売り物の教養主義のイデオログにはなりえなかった。新渡部は、一高の校長ともあろう者が大衆通俗雑誌に執筆し人気を得たという批判をたびたび受けている²⁵⁾。何でも読んでいるが何も書かないために「偉大な暗闇」という尊称を与次郎から奉られる広田先生（彼も一高教師だが）とは対照的だろう。「あれだから偉大な暗闇だ。何でも読んでいる。けれども些とも光らない。もう少し流行るものを読んでももう少し出娑婆ってくれと可いがな」と与次郎は嘆くのである。「偉大なる暗闇」は一種の伝説となって全国の（旧制）高等学校に広まり、どの高等学校にも一人ぐらいの広田先生（のモデル）が存在することになったという²⁶⁾。こうして内面性を見本のような広田先生が教養主義世代の尊敬の的となる一方で²⁷⁾、教養主義じたいは「流行るものを読んでももう少し出娑婆」ることによって支えられ、従ってこの時期の出版メディアの発展と分かちがたく結びついていた。

吹田順助もまた、岩波茂雄の一高時代の友人として、岩波書店の草創期に活躍した「書く人」・「翻訳する人」、すなわち教養主義の担い手のひとりだった。大正10年（1921年）に、当時の文化主義の親元であるドイツ西南学派のヴィンデルバントの『十九世紀ドイツ思想史』を岩波書店から翻訳出版するという、あらゆる点において教養主義的な余りに教養主義的な仕事を残して

「文学」の裏切り

いる。ここでもう一度、吹田の教え子や有島武郎が言おうとしていた、吹田順助の落ち着きのない猛烈な仕事（翻訳と著述）の仕方を思い出してみよう。残念なのは、吹田が阿部次郎や安部能成ほどには教養主義の中心人物とはならなかったことである。二番手の人間はつねに「流行るものを読んでもう少し出娑婆」ることをしつづけねければならない。沈黙したら世間から忘れられるだけなのだ。

吹田は走りつづけなければならなかった。教養主義を高く掲げつつ、つまり、メディアへの登場を確保しつつ、教養主義からナチスへと走りぬけたのである。

昭和20年の活躍、あるいは第二の裏切り

昭和20年1月7日、吹田順助は、三男周郎がマニラ湾外で戦死したという内報を受け取る。吹田は四男一女に恵まれるが、札幌で生まれた三人の男児を成人してから次々に失った。札幌に赴任して2年目に、家事に困った吹田があっさり見合い結婚したのを指して、従弟の医科大学生が「順助君は文学者なのに、バカに簡単に結婚しちゃったものだな」²⁸⁾と言ったそうだが、そのような思い出を自伝のなかで苦笑混じりに語る吹田は、たしかに小説家にふさわしい波瀾万丈と無頼とを求めていたし、この憧れを結婚後ももちつづけた夫が妻を苦しめたことを告白しもする。ところが、「ドイツ文学者」にはふさわしかったはずのこの平凡な家庭が、あまり詩的ではない崩壊をむかえる。「長男、次男が少年時代になると一種の変質性を発揮するようになり、不良児の行為にかぶれそうな危険が見えて来た」²⁹⁾のだ。「ときどき、ああいう子供を持った私は、教師などをやっている資格もないのではなかろうか、この際出来るなら教職師にでもなって、不幸な不良児の感化事業にでも従事したら、何程かの罪滅ぼしになるかも知れない……そんな風にしみじみ考えたこともある」²⁹⁾。結局、長男と次男は吹田に多くの金と苦勞を要求したあと病死してしまう。そして、唯一大学を無事に卒業し満鉄調査局に勤めた三男を載せた船が轟沈されたのだった。

吾子死すの内報しらせもたらし老妻と声あげて泣きぬ日もたそがれに³⁰⁾

短歌に詠まれた三男の死はまた一篇の小説にもなった。「別に発表しようという考えもなかったが、たまたま東大新聞で小説を募集するというので、滝川厚三の隠名の下に、試みに投稿してみたのである」³¹⁾。見事に当選した小説『内報』は昭和21年1月の東大新聞に掲載された。この小説はのちに「世界ノンフィクション全集」(筑摩書房)に収録されるので、大抵は同人誌に発表された吹田の創作のなかでは最も人々の目に触れたものであろう。

「文学」に一生を捧げた吹田の子供たちは、最も愛された子供であった三男も含めて、あまり「文学」的な人間でも「学問」を好む人間でもなかったらしい。「四男は上の二人ほどの事はなく、ただし学業の方などで親にとって相当の苦勞の種であった」²⁹⁾と吹田は語っている。長女は東京女子大を卒業したあと、なお東京帝国大学の聴講生になることを望んだのだが、吹田は、このおそらく最も吹田の素質を受け継いだ子供に、学問や文学よりも結婚をすすめるのである。吹田にとって「文学」とはあくまでホモソーシャルな男性中心的なものであった(まさに、『三四郎』の世界なのである)。

もっとも、長女は、たとえば『回想の吹田順助先生』のような本がかもしだすホモソーシャルな排他的・特権的雰囲気に見事に適合していると言えよう。父・順助の思い出を語る長女の文章は父への過剰な尊敬のためか平凡で儀礼的な匂いさえもっている。ところがそれに対し、不肖の息子であるはずの四男の追悼文は父との肉体的・精神的葛藤(「我が家は、まさに、父と子の反目の連続であった」³²⁾)を報告しながら、父の悲しい苛立ちを描き出している点で、『回想の吹田順助先生』の最後を飾るにふさわしい「文学」的余韻をもってしまう。「お前には文学はわからない」³²⁾とは、不機嫌になった父が四男によく言う台詞であった。「父は家で陽気なところは、めったに見せなかったが、一杯やって、ことに機嫌の良い夜など長唄や調子はずれのフランス国家カローライが八帖の間から聞こえてくると、私はよく、何かほっとした気持ちになったものだ」³²⁾……。

「文学」の裏切り

そして、三男の死を描いた『内報』。これは、大学を停年退職した元大学教授「岸田」が息子の「修三」の戦死を聞かされる昭和20年1月から終戦直後の秋までに体験し考えたことを描く一種の私小説である。ただし、この昭和20年の2月、吹田が長年あたためてきた「国民文学論」（日本国家科学体系第11巻所収）を出版したことは登場しない。「岸田」はあくまで無力な老人にすぎないのだ。この「国民文学論」では、「ナチス維新の酵母」「ナチスとドイツ浪漫派」「ナチス文化の特質と由来」「現代民族主義の根本問題」「文学を通じて見たる独逸民族」「ゲーテの『世界文学』」「ドイツの東進とその歴史的必然性」「日本文化精神」などの吹田の論文やエッセイで再三主張されてきたこと、つまり題名だけ見れば内容は読まなくても自ずと分かってしまうのだが、「文学」は個人主義的自由主義的描写の態度を克服し協同体的感情、民族意識、日本精神を描かなければならないということが繰り返されている。当時の日本を席卷した言説を、ナチス文学を擁護しようとしている「ドイツ文学者」の立場から言い換えたものと考えればよいわけで目新しいところも別になく、たいへん理解しやすい。たとえば「一九三三年三月二十三日におけるナチス宣言においては、総統は文学・芸術・演劇等はすべてドイツ国民性の本質の内に存する永遠の価値の保存に奉仕しなければならないことを厳かに言明した」³³⁾ などという一文を引いておけばもうそれで十分だろう。しかし、次のような吹田の文章はぜひとも引用しておかなければなるまい。

国民文学などを提唱する者は、実際に創作の苦勞をしていない机上の空論家の単なる論理的構成で、ほんとの作品は作家の日頃の修練と苦心とから成るより外はない、苟くも作家たる以上、国策文学や便乗文学などの議論に耳をかす暇はない、昨日の作品と今日の作品とガラリと一変するなどは途方もないでたらめである、というような見解で、それは特に既成作家や一部の読者層の間に漲っているようである。（中略）（それに対する反論として……引用者）ただ次の事だけを明らかにして置こう。それは即ち、

私たちのいう国民文学は決して国策文学でも便乗文学でもないということ、次には文学の事に関して作家もしくは文壇人以外の者の言説を排拒するのは、そういう人達の封建的閉鎖性を裏切るより外の何ものでもない、ということである³⁴⁾。

そもそも、「従来の文壇的作品—大衆文学も含めての—に対する争うべからざる不満が、何か新しい作品、大きな時代の転換期にふさわしい作品、この未曾有の混乱時代に光明ともなり、指導力ともなりうるような作品を要望せしめるに至り、それがつまり国民文学の発生を促す動機となった」³⁵⁾のではなかったか。無論ここにまず、文壇に入れなかった吹田の個人的怨念を見いだしてもよいだろう。吹田もまたナチスの文化政策を「革命」として捉え熱狂した一人であるが、それは既成の文壇ヒエラルキーの破壊を意味していた。そして、日本の翼賛時代も「ジャーナリズム界の地位革命（ステイタス・レボリューション）を起こすには絶好の好機であった」³⁶⁾と藤田省三は言う。すでに「ドイツ文学者」として学界内でもジャーナリズムの世界でもそれなりの地位を得ていた吹田がなお一種の「地位革命」を望まなければならなかったのは悲惨だ。藤田省三はさらに次のように続ける。「むろん登場の条件は翼賛体制の賛美と在来の『有閑文化人』の『自由主義』性の攻撃であった。この時代ほど、単に著者が自分の存在をしめすというだけの意味しか持たない書物が氾濫している時代は珍しいのではないだろうか。戦後デモクラシーのもとでも出版数の異常な昂進が見られるけれども（翼賛時代の連続！）、まだこの場合には書いてあることがそれぞれ異なっていることが多い。翼賛時代には同じことを、しかもいわれなくても知っていることばかりを書いた書物が溢れていたのだ。事実上では標題と著者名をもちながら意味の上では名を持っていない、意味的匿名性の文化行為が大量に発生したのは現代史上この時代が最高だ」³⁶⁾（傍点原文）。

昭和20年の吹田順助の「国民文学論」もそうした「意味的匿名性の文化行為」のひとつだった。あるいは、日本の「ドイツ文学者」たちが、あたかも

「文学」の裏切り

「ドイツ文学研究」の地位を引き上げる千載一遇のチャンスであるかのよう
に、ナチス文化を称賛したことも、そのような行為のひとつだった。同じ昭
和20年に書かれた『内報』は滝川厚三の偽名、つまり一種の匿名のもとに印
刷されたが、吹田の苛酷な体験を知る人間ならすぐに作者の本当の名に気づ
いたという。もちろん、それは吹田順助の「国民文学論」にふさわしい作品
ではなかった。

前々から「一億一心」、「八紘一宇」、「東亜共栄圏」などという空洞な標
語の下に行なわれている、いっこう見通しのつかない、なんの希望もない
戦争が果たしていつまで続けられるのであろうか — こんなことを考え
ると、岸田は誰にも漏らしようもない憤懣のために、ぢりぢりして来るこ
ともあった³⁷⁾。

かつては個人的悲しみによって裏打ちされていたかもしれない、こうした
言説も今ではすっかり「国民的」紋切型になってしまった。ただそれだけが
悲しい。

註

- 1) 吹田順助「教師と創作」、『くだもの皿』所収, 1941, 警眼社, 29頁。
- 2) 吹田『旅人の夜の歌』(以下『旅人』と略す), 1959, 講談社, 68頁。
- 3) この問題については, 和田利夫『明治文芸院始末記』(1989, 筑摩書房)を参照されたい。
- 4) 江藤淳『漱石とその時代(第三部)』, 1993, 新潮社, 388頁。
- 5) 『旅人』, 57頁。
- 6) 磯田光一「訳語『文学』の誕生」、『鹿鳴館の系譜』所収, 1991, 講談社学術文庫, 26頁参照。
- 7) 『旅人』, 104頁。
- 8) 『旅人』, 18頁。
- 9) 『旅人』, 68頁。
- 10) 神保謙吾「過ぎし日のことども」、『回想の吹田順助先生』(以下『回想』と略す)所収, 1972, 同学社, 62頁。
- 11) 『旅人』, 102頁。
- 12) 高橋健二「初めての出会い」、『回想』所収, 105頁から108頁。
- 13) 中島健蔵『疾風怒濤の巻 回想の文学1』, 1977, 平凡社, 122頁から127頁参照。
- 14) 石倉小三郎「上田先生の思い出」、『上田先生の思出』所収, 1956, 非売品, 28頁。
- 15) Jakob Overmans (高橋健二訳)「現代独逸文学の精神に就いて」、『独逸文学』第一輯, 1926, 郁文堂, 29頁から38頁。
- 16) 木村謹治「現代のドイツ文学・序文」, ヘルマン・シェーファー(稲木勝彦訳)『現代のドイツ文学』所収, 1944, 東京開成館, 2頁。
- 17) 『旅人』, 253頁。
- 18) 江沢讓爾「吹田先生のこと」、『回想』所収, 95頁。
- 19) 有島武郎『半日』, 有島武郎全集第二巻所収, 1980, 筑摩書房, 17頁。ところで, 若い吹田に小説家になるだけの才能が欠けているという事実を告げることができたのは有島ただ一人だった。吹田は有島に, 「しかし, 私はそれにも拘わらず, 今後も創作に打ち込んで, もっと自分を突き詰めてみようと思う」と返事する。有島はその手紙を見て母親の前であったにもかかわらず思わず涙をこぼしたという。有島は「それ(吹田の創作に対する批判……引用者)が私にどんなに打撃を与えるだろうかと, 心ひそかに心配していたのであろう, それでそういう処へ私

「文学」の裏切り

の返事——彼の言葉をありがたく受けとったという——が着いたので、思わずホロリとしたのではなかろうか。或は、才能の貧しさにひきかえて、私のポエジーへの、創作への愛のあまりにも強いのをみとって、一種の哀憐の念を起こしたのかもしれない。しかし、私としては、彼の心衷をそうは取りたくなかった」。『旅人』、98頁。

- 20) 和田洋一「『ハイネ人生読本』のために」、中野重治全集第二十卷月報所収、1977、筑摩書房、7頁。
- 21) 前田愛「明治四十年代の青年像—『三四郎』論—」『国文学』1971年9月号、85頁から90頁。
- 22) 唐津順三『現代史への試み』参照。1963、筑摩書房。
- 23) 鶴見俊輔「翼賛運動の設計者 —近衛文麿—」、『鶴見俊輔集・4 転向研究』所収、1991、筑摩書房、212頁。
- 24) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』、1995、岩波書店、19頁から24頁参照。
- 25) 同書、31頁参照。
- 26) 高橋英夫『偉大なる暗闇 —師岩本禎と弟子たち』、1993、講談社文芸文庫、27頁から46頁参照。
- 27) 吹田順助も「偉大なる暗闇」こと岩本禎（一高のドイツ語教師）を戦後の新制大学などには見られなくなった伝説の教師として称賛している。吹田、「こんにゃく問答」、『ドイツ語』（1951年12月号）、第三書房、32頁参照。
- 28) 『旅人』、215頁
- 29) 『旅人』、215・216頁
- 30) 吹田順助「呼子鳥 —南海の藻屑と消えた三男周郎の霊に—」『葦の曲』所収、1952、非売品、67頁。
- 31) 『旅人』、238頁
- 32) 吹田逸夫「亡き父のことなど」、『回想』所収、244頁から248頁。
- 33) 吹田順助「現代ドイツ文学思潮」、『パンと見世物』所収、1947、生活社、269頁。ただし、吹田は「国民文学論」のなかでは、ドイツの国民文学論が日本にそのまま適用できないと強調している。日本において、いちばん重要なのは「国体」である、と。Vgl. MATSUSHITA, Taeko, *Rezeption der Literatur des Dritten Reichs im Rahmen der kulturspezifischen und kulturpolitischen Bedingungen Japans 1933–1945*, 1988, Verlag breitenbach Publishers, S.97.
- 34) 吹田順助「国民文学発生の必然性」、『パンと見世物』所収、231頁。
- 35) 同論文、233頁。

- 36) 藤田省三「昭和15年を中心とする転向の状況」, 思想の科学研究会編『共同研究 転向』中巻所収, 1960, 平凡社, 42頁。
- 37) 吹田順助『内報』, 『葦の曲』所収, 138頁。

Opfer der Literatur
— Junsuke Suita und seine Zeit —

Rieko Takada

Resümee

Die vorliegende Arbeit ist ein Versuch, am Beispiel von Junsuke Suita (1883–1963), einem der renommierten japanischen Germanisten in der Showa-Zeit, historische Hintergründe der pronazistischen Diskurse in Japan herauszufinden.

Seinen Memoiren zufolge gab sich Junsuke Suita mit dem Germanistensein nicht zufrieden und hegte lebenslang den Wunsch, Schriftsteller zu werden. Suitas Schüler preisen sein literarisches Talent, d.h. seine Unzufriedenheit mit dem Nur-Deutschlehrer-sein. In dem Diskurs über Suita hat sich in der japanischen Germanistik die Tradition gebildet, daß selbstgenügsame Nur-Germanisten nicht für literarisch begabt gehalten werden. Die japanischen Germanisten, die viel zur Einführung der NS-Literatur beitrugen – darunter auch Suita, der 1938 die Übersetzung von „Der Mythos des 20. Jahrhunderts“ publizierte und viele pronazistische Aufsätze veröffentlichte – waren zuversichtlich, daß ihre *literarische* Arbeit die Ketten der esoterischen Germanistik zerbrechen könne.

Suita gehört zu der zweiten Generation des Meiji - Japan, den sogenannten *old liberalists*. Im Unterschied zu ersten Intellektuellen des

modernen Japan fehlt es dieser Generation an der ernststen Konfrontation mit der Nation. Ihr Schutzgott war der unpolitische Bildungshumanismus, oder anders gesagt, die *literarische* Innerlichkeit, die aber nicht innen bleiben, sondern zum Ausdruck gebracht werden mußte. Der japanische Bildungshumanismus ist also eng mit der damaligen Entwicklung der Medien verbunden. Suita war kein Germanist mehr, der seine Fachkenntnisse exklusiv an der Universität vermittelte, sondern Bildungshumanist, aber leider ein zweitrangiger, der sich durch das immer weitere Schreiben und Übersetzen in seiner Stelle behaupten mußte. Ohne Überlegung übernahm er die Übersetzung von Rosenbergschen Werken. Das Entscheidende war für Suita, daß ihm der Nationalsozialismus wie ein *literarisches* Phänomen vorkam.

Im Februar 1945 veröffentlichte Suita die Abhandlung „Über die Nationalliteratur“, auf die die national-völkische Germanistik großen Einfluß ausübte. Dort behauptete er, daß die Literatur modernen Individualismus sowie Liberalismus überwinden und den japanischen Geist darstellen müsse. Gerade einen Monat vor der Erscheinung dieser nationalistischen Abhandlung erhielt Suita den traurigen Bericht, daß sein dritter Sohn für das Vaterland gefallen war. Nach dem Kriegsende schilderte Suita in einem Prosawerk den Tod seines Sohns. Diese Erzählung, in der sein Sohn nur als Opfer des sinnlosen Kriegs auftritt, wird aber natürlich seiner Theorie der Nationalliteratur nicht gerecht. Das könnte die letzte Rache der Literatur gewesen sein.